最後の情報処理センター長として

情報処理センター長　渡辺 義明

はじめに

情報処理センター (以下センター）の長に就任して約3年になります。3代目のセンター長に当りますとともに、学術情報処理センター設置に伴い最後の情報処理センター長にもなる見込みです。

私が前センター長から受け継いだ課題は、「学内の情報化」と「省令施設への改組」の2つでした。幸いな事に、多くの方々のご支援によって両者ともに形が見えてきていることを喜んでいます。以下、センター長在任中のいくつかの思いを記し、ご支援頂いた方々に感謝の意を表します。

システム更新

就任して当初の作業の一つは、一年後に迫っていたシステム更新の概要をまとめることでした。システムの将来性と安定性を見極め、維持管理負担と利用需要、既存サービス維持と新規サービス導入など適切にバランスするのはいつも難しい問題です。

この当時はWindows95の登場によってPC（パーソナルコンピュータ) やインターネットの普及がマスコミを賑わし、各研究室にもPCが急速に普及した時代でした。センター利用にも、電子メールやWebなどのネットワーク利用増加、そして全学生に対する情報素養教育の強化が見込まれ、特に教育用システムについては本当に様々な方策が議論されました。結果として、UNIX環境とWindows環境の両者を全ての端末から共通のユーザIDとパスワードで使えるという、全国的にも誇れるシステムが構成できました。熱心に検討いただき導入後も様々な形で支援していただいている方々に、ここに深く感謝いたします。

導入システムは幸いにも比較的順調に稼働し、利用者の評判も悪くないようです。このシステムは、ほぼ安定期に入ったところですが、既に次期システム更新の検討が始める時期が近づいています。様々なシステム管理方策が出現していますし、利用者の要求も変化しています。今度はどのようなシステムが適切でしょうか。

情報化対応

センターを取り巻く社会環境が急速に変化している中で、センターを適切に維持する方策を模索する必要がありました。学内外からは、情報化推進の要求が大きくなっています。それに答えて、別稿の歴史に記しますように様々なことを行ってきました。一方、センター

の現状を見ますと、利用者数・機器数の増大、インターネットおよびLANの出現と一般化、集中管理に不向きなPCの普及、対外的情報公開促進の要求、不正アクセスの拡大、ネットワークの業務利用拡大等々によって、作業量の増大が続いています。

この状況に対応するため、管理維持作業の定型化と分散化を模索してきました。同時に学内の情報化体制の整備、業務分担の明確化、そしてセンター自身の体制整備を進めようとしてきました。しかし、省令組織への改組作業に時間を取られ、作業が中途半端で停滞したままになってしまったことが残念です。学術情報処理センターの構築を契機として議論が進む事を期待しています。

組織改組

センターを省令施設へ改組することは長い間の念願でした。これを任期中に達成できたことは喜ばしいことです。歴代のセンター長を始めとする関係者の過去の積み重ねと、学長以下学内外の多くの方々のご努力とご協力があってのことと感謝しております。

さらに、他大学で認められてきている「総合情報処理センター」を上回る組織として認められる見込みとなっています。この概算要求は、高度情報化推進委員会において取りまとめ、「情報基盤センター」として文部省へ提出しました。同時期に同一名称の要求が東京大学から出ていることが分かり、方向性は間違っていないと意を強くしましたが、この年度は残念ながら見送りとなりました、次年度には、業務内容の整理を行い、名称も筑波大学にならって「学術情報処理センター」と改めた要求とし、これが今回設置の見込みとなっています。

新センターの概要については別稿に記しましたので、そちらをご覧下さい。要求書作成にあたっては、ワーキンググループや担当事務の方々に多くの作業を強いてご苦労をおかけました。

おわりに

学術情報システムを大学組織の中で如何に位置付け維持発展させていくか、模索はこれからです。今後も、現センターおよび学術情報処理センターに対してご指導とご協力をお願い申し上げます。